

「バロン・サツマ」と呼ばれた男

村上 紀史郎著

開高健の『開口閉口』に「ケタはずれの豪遊をパリでやった日本人」薩摩治郎八が登場する。中島

健蔵や岡本太郎も同席する葡萄酒鑑賞会の宴のこと。周囲の酒談義にニコニコしてうなずくだけだ

った「薩摩太陽神」がおもむろに口を開く。するとロスチャイルドの莊園はとか、ロマネ・コンテ

イはとか、モエ・テ・シャンドンの館は、などという話が、淡々とした口調で始まったからたまらな

い。一同声を失って押し黙るばかりだったという。（バロン・サツマ）

この「バロン・サツマ」の行状は、自伝『せ・し・ぼん』や雑文集『なんじゃもんじゃ』にも綴られて

いる。だが記憶の不確かさに脚色も手伝って、実話とも法螺話とも定めがたかった。本評伝は、

現地取材で、可能なかぎり「放談」の裏を取った奮闘の労作だ。

綿織物商の三代目に生まれ、一九二〇年に渡欧するや、その後三十年間で、六百億円相当の富を蕩



村上紀史郎

「バロン・サツマ」と呼ばれた男
薩摩治郎八とその時代

証検を談放の行状の外れた

尽した伝説の快男児。その「真実に初めて迫る」試みである。

「男爵」はパリ国際大都市に「日本館」を建てた功績で有名だ。通称「薩摩館」落成は二九年五月十日。来賓の共和国大統領を迎えたのは、当時弱冠二十八歳の治郎

八。オテル・リッツでの記念晩餐会では、一億円相当の料理が一夜にして散財されたという。

だが本書の眼目は、放蕩息子という通説を覆すにある。国際学生交流の夢に燃えるアンドレ・オノ

ラに傾倒した治郎八は、日仏文化交流を舞台裏から支える稀代の慈善家パトロンへと変貌する。華族

やパリ社交界の著名人と対等に付き合う次郎八は、その傍ら、藤田嗣治に晴れ舞台を用意し、『修禪寺物語』上演資金を密かに提供し、

原智恵子ほかの留学を援助した。敗戦後に知己を得た美輪明宏

は、治郎八の「本領は無一文になつてから発揮された」という。一九三五年の薩摩商店閉店にも動じ

なかったこの人物からは「本当の意味での豊かさを知る」懐の深さが滲み出る。著者によれば、治郎

八の「フランス食へ歩き」は、辻静雄の見識をはるかに凌駕している。「吃驚」すべき「通」の底力。

その文化事業への見識は、大不況の今こそ、再評価に値するだろう。

藤原書店・三、八〇〇円

▼むらかみ・きみお 47年生まれ。フリー編集者。「ランボー全集」などを手がけた。

国際日本文化研究センター教授

稲賀 繁美